



教育の力

女高師教授 吉田 熊次
文學士

私の今日申上げやうとする事柄は題として申上たならば教育の力といふ事であつていかにも抽象的の御話のようでありますが、教育といふものは、その高等と初等とを問はず漠とした理想が根に横はつて居ないと實の入つた教育は出来ないと思ふ。教育に關して効果をあげようとするには、教育者が興味を持つと同時に職務に對する信仰をもつてかゝらねばならぬ。單に教育上の技術のみを授けて効果あらしめやうと思つて居るのはまちがひだらうと思ふ。其の手段を運用する上の確信即ち、漠とした所謂空想に近い考へをもつてゐることが大教育家たるに必要なことである。百年以前の歐洲の社會では、教育の力を非常に大

なる者と思つてゐた、然るに現存の人は伶俐になつたから無暗に人を信じない、疑ひ深い、悪るくいへば懷疑的である。教育の効果はある點まではあつても、これに限りがあつて絶対の力があるといふ事は出来ないと論ずる。所が百年以前には今とちがつてをつた。之れは教育史上明かなることである。例へば初等教育の開祖ともいふべきペスタロツチは何の爲めに教育にたづさはつたであらうか、教育に關する信仰が厚つたからである。ペスタロツチは人間の精神の力に關する信仰が非常に強かつた、適當に開發したならば、人の本性にはたしかに圓滿なる性が備つてをると確信してゐたのである。ペスタロツチは初めから感情的の人で最初は牧師にならうとし、次は法律家になつて身をたてやうとし、第三には農學家となつて細民を救はうと思つたのである。ビルといふ町の近くに大きな荒野を買つて、家を作りノイホーフと名つけたのである。然るに此れに失敗してしまつて僅かに數年の間に財産を失つた、是れから教育によつて哀れる人々を救ふとした、これが教育

に手をつけた初めである。チエリッヒ、ベルン、パ
 ーゼル等の市から凡そ四五十人の乞食の子を集め
 て學校を開いた。そして半は仕事をさせ半は學問
 させ自らも乞食同様の生活をして教育をしてゐ
 た。元來この少年等は錢のない者のみだから、な
 か／＼教育の効果が表れない、食物を飽へると足
 りないといつてぬすみ食ひをし、又衣服を與へれ
 ばそのまゝ遁げて行く。かくして是れも數年にし
 て失敗に終つたのである。それであるから今の人
 の考でするなら人の性質は悪い者であるとの結論
 を得べき筈である。然るにペスタロツチはどこま
 で人の性は本來善いものといふ考へを變へな
 い。彼はその後スタンツ、ブルグドルフミュンヘン
 ブッフゼー、エパドン等に於て幾多の困苦にわた
 のにも拘らず教育の力の大きなりといふ事について
 は少しも信仰を曲げない、終生教育に熱心したの
 は、一に教育の力に關する信仰の厚かつたからで
 ある。

獨乙に於ける教育の發展もまた教育の力に關する
 信仰が基であると思ふ。それは十九世紀の初めナ

ポレオンが獨乙に侵入しプロイセンは殆んど滅す
 る迄にふみにぢられて一八〇七年のエーナーの戰
 争後にはプロイセンの王はケーニヒベルヒにも居
 る事が出来なくなつて露細亞の國境に都を移した
 といふ困難に陥り、その講和條約の際には領土の
 半をさいて辛じて獨立だけを許され過大なる償金
 を出したのである。この苦しい中にたつて彼等は
 再び國を盛んにせねばならぬと思つた。それには
 教育によつて恢復するより外はないと考へたので
 ある、ルイゼ皇后が宰相フォンスタインを呼びて
 國運の恢復策を問はれた時にスタインはペスタ
 ロツチの教育主義によりて恢復を計るがよいと答
 へたのである。その結果としてプロイセンの教育
 は俄かに盛んになつた、フイヒテもまた一八〇七
 年から一八〇八年に渡る冬の間はベルリンに於い
 て十數回の講演をした、其の題は「獨逸國民に告
 ぐ」といふのであつたが、その大意は獨逸が衰へ
 たのは物質的の利害關係をのみ考へて互に共同し
 て敵に當るといふ考へをせぬからである。我々は
 精神力の開發をつとめ、精神力の力によつて理想的

に活動して行かねばならぬ。それをするのにはペスタロッチの教育主義によるより外はない、これに依て心の力を開展させ以て獨乙の國運を挽回しなければならぬと是れによつてペスタロッチの教育主義は他國よりも先に獨逸殊にプロイセンの教育の上で植えつけられたのである。この精神は五十年後に至り大に顯れ、遂に佛蘭西に恨みを報いることが出来たのであると考へられる。

かくの如く十八世紀及び十九世紀の初めに於ける人は教育の力の偉大なる事を信じて疑はなかつたのである。フレイベル氏も一つの哲學思想から教育をたてるよになつたのである。フレイベルの考へも人性に關する信仰があつて、安心して教育に従事したのである。人の性質が善なるものがあるものならばそれは教育の力によつて開發して行かなければならぬ、當時の人はかく教育の力を信じたが次第に世の中が變つて來た、十九世紀に入つてから獨乙の物質的文化は次第に進歩して來て再び人心が物質的にかたむいた。特に普佛戰爭以後には愈々實利實用的になつて來たからして

今日の獨乙人は十九世紀の初めとは非常に考へが違つて來てゐる。教育に關してもむしろ其の力に制限のあることを考へるよになつて來たのである。次に哲學者中にも同様の考へをもつて來た。シューベンハウエルは人の性質は教育でもつてかへようとするのはむだ事であるといつた、一宇宙の本性人の本性は一種の盲目的の意志であるこのものは教育によつてかへる事は出来ないのである生活の慾は人の本性であるから教育でかへやうとするのはむだ事であると考へたのである。この説の誤りである事は學者の間に於いて十分認められてをるのであるがシューベンハウエルは眞に文章がうまいからして又その文章は平易でよく人によまれるからして、またその厭世主義は物質を欲する人には適してをるので、非常に廣つたのである。人の慾には限りがないが、之れを満足させる物は限りがある、その限りあるものをはしいといふ限りなき慾は必ず満足を生ずるのは定まつて居る。かくシューペンハウエルは能文を以つてよき込んだから人人一層教育の力といふ事を疑

うやうになつた。なほこの外教育の力に制限があると説いたのは第一ダーウインの進化論である。ダーウインによつて初められた進化論はなほ教育の力を限るかといふと、進化論の主張する處は進化は一方に於ては外界の状態に適する事に於いてなされるのである、又他の方に於ては人の性は遺傳によりて次の世に傳はるのである。この遺傳性は事情によりて進化はするがこれを人工をもつてかへる事は出来ぬのである、従て教育の力を限らるゝ事になるのである。次にプロッカーとロンブローニなどの唱へ出したる犯罪人類學もこの説を助けた。如何にして犯罪は行はるか、これは教育によりてなほす事は出来るかといふにこれは遺傳性のものだから如何ともせん方ないと説くのである。即ち犯罪の原因は先天的であるによつて教育は悪い人を善くし悪い事をさせないようにするといふことが出来ぬわけである。

十九世紀の初めに於てあれ程確な信仰をうけた教育はこゝに至つてのぞみ少いように考へられるよになつた。これは誠に教育の爲めになげくべき

である。教育に効のないものとしたならば、教育に實の入れぬはその筈である。されど教育が事實力のないものなれば我等は事實をまげても教育の力を信仰する事は出来ぬ。併し私は教育の力は決して左程悲しむべきものでないと信ずる。アメリカにエレンケラーといふ女が居る。二才にて啞となり聾となり盲となり、七才までは殆んど何等の精神的交際を他となすことが出来なかつた。又その頃には性質も極めて悪く殆んど手のつけ様がなかつたのであるが、その後一人の教師を備ひ、僅かに觸覺をたよりに教育をしたのであるが、エレンケラーはその後大學に入學して英獨佛その他の國語に通じたといふのは人間の力は如何に強いものであるか教育の力はどんなに偉大なかは驚くべきである。盲目にして且つ啞と聾との人が教師の力を通して觸覺のみで、學問上の修養をし古來の文學にまで通じたといふのは教育の力の如何に偉大なるかを證明するのである。この人は自分で自序傳を書き又樂天觀といふ小さな書物を書いてをる。世の中を少しも恨まず非常なる快樂でも

つて世の中を送つて居るのである。彼の女は云つて居るに私は偉大の希望を持って居る其希望は私の生命である、精神上で世の中を暮したら人には悲しみといふものはないとかいてをる。こゝに於て教育の方の大なる事を信ずるに十分の根據と思ふ。この事を頭にもつて教育に従事したならば一切の教育事業は生きて希望を新にする事が出来ると思ふかくてこそ保育の開祖たるフレーベルの心に叶ふ事が出来ると思ふ

○歯と唇の美

歯は口の美を添ふるに重大關係を有して居るから平生其手當に注意して齒の排列の悪しきものは齒醫者にかゝり少しにても齒痛みのあるものは砂糖を用ひし菓子などを多く食べぬ様に注意せねばならぬ又齒の排列整しからぬ時は音聲が此處より漏れて聞き苦しきものなれば成るべく眞珠を連ねたやうに綺麗にして置かねば可かぬ、それから口を閉ぢた時は上下唇の接合線は微しく曲つて「へ」の字なりになるが「へ」の字の如く彎曲せぬ範圍内にて結局「一」字形と「へ」の字形との中間に位するも

のを宜としてある又下唇は上唇よりは人目につき易けれど唇の美は上唇に多く存するもので鼻と唇との間が餘りに長いか餘りに短いかは共に美を損するものなれど生れつきならば整方がない又齒が齦の外に現はるゝのは醜きものであるから楊子を使ふ時に氣を着けて齦を損せぬやうにするが肝心です或外國人は斯う言つて居る人の理想の齒は清水のうちにある眞白な小石のやうな清く美しくあらねばならんと其の眞白な小石の様な齒を造るには毎日良好な齒磨にて齒を磨くのが肝心である日本人は概ね朝一度しか齒を磨かぬやうであるが歐米の注意深き紳士や貴婦人は齒は生命の關門であると思ふ事を常に念頭に懸けて居るから非常に大切にして朝起ると磨く食事の度に磨く寝る時に磨く日々屹度五六度は磨くのである美人がニコリ笑ふ時眞白な美しい齒が見ゆるのは其容貌に一段の光彩を添える齒は顔の美から云うても又身體を健康にする點から見ても必ず大切に保護し大切に磨かねばならぬ殊に幼少の時から両親が始終注意して日々二三度は是非磨く習慣をつけて置かねばならぬこれさへ實行すれば如何に齧齒の素質ある者でも屹度打勝つて立派な綺麗な眞珠の様な眞白なそして健全な齒を保つに至るべし(婦人衛生雜誌)